

活動している理想的発話状況

— 討議／論争デモクラシーを超える子どもの哲学 (p4c) ハワイとみやぎ —

An Ideal Speech Situation in Action

— p4cHawaii and Miyagi beyond Deliberative and Agonistic Democracy —

田 端 健 人
ワーナー グリフィン
Taketo TABATA
Griffin WERNER

目 次

解題

1. はじめに
2. 討議デモクラシーへの道：p4cHIは私たちをどこかへ導くのか？
3. 論争デモクラシーへの道：p4cHIは私たちをどこにも導かないのか？
4. デモクラシーを超える道：p4cHIは禅の一形態だろうか？

Summary

The aim of this paper is to place philosophy for/with children (p4c), Hawaii-Miyagi style, in the context of deliberative and agonistic democracy to describe its theory and practice in greater depth. First, we examine the tension between p4c and deliberative democracy. We extract two core concepts out of Jurgen Habermas's deliberative democracy, namely, consensus building and ideal speech situations, and examine the differences and similarities between them and p4c. The ideal speech situation is resonant with p4c. In order to dispel the misconception that the ideal speech situation is unrealistic, Heidegger, who influenced this concept formation, was referenced. Through textual interpretation, it was revealed that it is ontological and lived experience. In terms of consensus building, p4c is at odds with deliberative democracy. In that point, p4c resonates with Connolly's agonistic democracy. After the overlap between the two was described, the differences between agonistic respect and the safety of p4c were examined. While agonistic respect is a cultivated civic virtue, it turns out that the safety of p4c is the competency of those with language skills, and there is no need for cultivation. The safety of p4c is an ontological prerequisite that makes deliberative democracy, agonistic democracy, and other forms of democracy possible. It is open to all possibilities. The conclusion of this paper is that this ontological dimension can be described and understood from the perspective of Zen. As an experiment, we have described the safe situation in p4c, which we call the ideal speech situation in action, from the perspective of Nishitani Keiji's standpoint of emptiness.

解題

本論は、田端とワーナーの共著英語論文の日本語訳である。オリジナルの英語論文は、『宮城教育大学紀要』第59巻に掲載予定である。本日本語訳にあたり、オリジナルにできるだけ忠実かつ読んでわかる訳を心がけた。英語としては自然であっても、直訳すると不自然になる文章は、思い切って意識した。必要に応じて、訳注や日本語文献も加筆した。オリジナルでは、日本語ならこんな文章を続けたいと思う箇所も、英語

では表現しきれなかったり、英語にはふさわしくなかったりした箇所があった。最小限であるが日本語訳では、第1著者のそうした思いを日本語で補った箇所もある。またハーバーマスやルーマン、ハイデガーの邦訳については、邦訳書を参照しながら、第1著者が原著から独自に訳出した箇所がある。

本論は、第2著者がJSPS（独立行政法人日本学術振興会）「令和6（2024）年度日本学術振興会外国人研究者招へい事業 外国人特別研究員（JSPS サマー・プログラム）」の助成を受け、同年6月から8月末にかけ、第1著者の研究室に研究留学したことに、端を発している。双方にとって非常に充実した3ヶ月であった。オリジナルは、共著者同士の緊密な対話と共同執筆によるもので、どの部分をどちらが執筆したかはもはや特定できない。ハーバーマスに関しては第1著者が、コノリーとp4cHIに関しては第2著者がイニシアティブをとったと言えるくらいである。第1著者が西谷啓治に関心をもったのも、第2著者のおかげである。本日本語訳は、第1著者の責任で執筆した。

1. はじめに

逝去直前の2010年、マシュー・リップマンは、教育における子どもの哲学（philosophy for children, 「P4C」と略）の意義と役割について、要約的な論文を執筆した。倫理を子どもに教えるというP4Cの役割に言及した際、リップマンは、P4Cを、ユルゲン・ハーバーマスの理想的発話状況と、ジョン・デューイの思考する教室の両者と比較し、次のように述べた。「多くの点で、哲学的探究のコミュニティは、理想的発話状況に類似している」（Lipman, 2001, p. 12）。ここで彼が示したかったのは、P4Cでは、実践と理論がいかに接近するかであり、また「それらに影響を与える教育的探究の精神が、同時に、教室の子どもたちをいかに生き生きとさせるか」（Lipman, 2001, p. 12）であった。つまり、P4Cは、ハーバーマスの理想的発話状況という概念を生きられた実践に変える、とリップマンは予感していたのである。アン・マーガレット・シャープ（2018）もまた、P4Cの「探究のコミュニティ」という概念の理論的基礎づけに、ハーバーマスの理論が重要な役割を演じるとみなした（cf., p.249）。しかし、ミーガン・ジェーン・ラベルティとの対談で、シャープ（2018）はまた、ハーバーマスの合理的理想主義に対し懸念を表明し、P4Cの話し合いの開放性や笑い話、逸脱やかりそめの問いは、ハーバーマスが提唱する議論や理性概念を超えると主張している（p.125）。リップマンとシャープにとって、P4Cは、

議論するやり方を学ぶとともに、受肉され生きられた活動であり、それはまた教室で子どもたちが表出する表情の合図—例えばお腹がすいたとか、緊張しているとか、飽きているといった—と一体になっている。

P4Cに関する多くの先行研究は、リップマンとシャープによって展開され鼓舞されてきたこともあり、教育に関するデューイの著作を参照するものの、教育とデモクラシー（民主主義）に関するハーバーマスの思想については、正面から批判的に取り上げてこなかった。例えば、近年の*Routledge International Handbook of Philosophy for Children*（2017）¹でも、デューイの参照は多いが、ハーバーマスへの言及は全くない。確かに、リップマンとシャープが開発したP4Cの思想的系譜は、パースからデューイに至るプラグマティストの伝統を強調すべきであろう。しかし私たちは本論で、ハーバーマスの仕事が、P4Cという実践ペダゴジー（Cam, 2018, 30）に潜む力を理解する新たな道を拓く可能性を探索してみたい。先述の通り、リップマンとシャープは、ハーバーマスの理論に親近感を抱いていたが、同時に、ハーバーマスの思想と自分たちが開拓しているP4Cの実践の道との相違にも気づいていた。ハーバーマスとの親和性は、探究のコミュニティのための必要条件に根ざしている。つまり、ハーバーマスの理想的発話状況という概念は、探究のコミュニティの社会的可能性と同様、討議デモクラシー（deliberative democracy）の成功のための条件となる。しかし、二人が感じた

¹ 部分邦訳は、グレゴリー他（2020）。

違和感は、理想的発話状況と討議デモクラシーに組み込まれた、ハーバーマスの合理主義と抽象的理想主義に由来している。対照的に、P4Cは、コミュニティの構成員一人ひとりの生きられた経験に即ちそう焦点化している。その生きられた経験は、合理的でもありうるが、感情的でもあり、しばしば非合理的である。つまりP4Cは、ハーバーマスのいう「生活世界」に根ざしているのであって、決して抽象的ではない。

私たちは、p4c²実践者として、ハーバーマスに対し、同じ親近感と違和感とを抱いている。そこで本論では、この緊張関係を精査し、p4cの視点から、ハーバーマス理論との呼応と限界を注意深く考察してみる。こうした緊張感をはらむ私たちの関心の出どころは、ハワイ版子どもの哲学（以下「p4cHI」と略）にある。それは、リップマンとシャープのP4Cの影響を受けたトマス・ジャクソンが、1984年に開発し、現在も発展している子どもの哲学p4c

である。ハーバーマスの鍵概念を描き出し、私たちのp4cの経験を観察し、ハワイとみやぎ（「p4cHI-M」とも略）の実践に参与することで、私たちは次のテーゼを明らかにする。すなわち、ハーバーマスの理論は、活動のさなかにあるp4cHI-Mの生きられた経験と実践を現象学的に記述するのを助けてくれる、というテーゼである。リップマンとシャープがハーバーマスに抱いた違和感とは対照的に、ハーバーマスのアイデアは、デモクラシーにとってのp4cの可能性について、新たな洞察を生み出すというのが私たちの知見である。デューイとハーバーマスのデモクラシー概念とp4cの発展に対する彼らの影響が、しばしばデモクラシーにおける討議概念を強調し、理性の公的な利用を促進する教育の役割を強調するのに対し、私たちは、ジャクソンのp4cHIに影響されたp4c概念を提示し、「討議」と対をなす「論争」デモクラシー(agonistic democracy)³を参照しながらp4cを検討する。論争デモクラシーは、ウィリア

² ジャクソン版が小文字でp4cと表記するのは、リップマンやシャープとのコンセプト上の違いからである。ジャクソンにとって、p4cは彼のいう「小文字のフィロソフィ」に根ざしており、アカデミックな哲学者たちが行う「大文字のフィロソフィ」の内容や活動とは一線を画している。小文字のフィロソフィは、私たちが生まれてこのかた身につけてきた一連の信念に関与する。それらの信念は、特定の言語や文化を通して、私たちの思考を条件づけ限定している。そして小文字のフィロソフィは、生まれながらの不思議感（センス・オブ・ワンダー）によって、こうした信念を問いに付す活動である(Jackson, *Philosophical Rules of Engagement*, 2013)。本論で「p4c」と表記する場合は、リップマンとシャープ、およびジャクソンを含む一般的な子どもの哲学の伝統を念頭においている。「P4C」はリップマンとシャープの、「p4cHI」はジャクソンの子どもの哲学を指示する。

³ コノリーのagonistic democracyは「アゴーンのデモクラシー」と邦訳されている（cf., コノリー, 1998, p.ix, p.392）。一方ハーバーマス由来のdeliberative democracyは「討議デモクラシー」という訳が一般的である（cf., 篠原2004の書名副題や第5章タイトル; 篠原2012の書名）。対をなすこれら2つの用語の訳が、一方はカタカナ、他方は漢字では、対応関係がぼやけてしまう。また、「アゴーン」というカタカナ英語は、人口に膾炙してないため、一般に理解しにくい。英語のagonisticは、古代ギリシア語のagoneに由来し、「闘争」「戦い」を意味する。そこで、「争い」を強調する「論争」を訳語とした。

日本における討議デモクラシー研究の第一人者である篠原一氏によると、「デリバレイティブ・デモクラシーのデリバレーションについては、専門家の間でも、審議、協議、討議、熟議と訳語が様々であり、統一することが難しい」（篠原, 2004, pp.202-203）とされる。この語の邦訳について、篠原（2004）は、「ただ議論を尽くして合意に達するのではなく、異論をたたかわすという意味をふくめて、『討議デモクラシー』という用語を使用することにした」（p. 203）と記している。確かに、討議の「討」の漢字には、「うつ」という意味があり、「敵討ち」のように「すみまてまわって敵をうってとる」とか「追求して攻め立てる」ことを意味する（学研『漢和辞典』）。それゆえ、「討論」に「異論をたたかわす」という意味を込めることができそうにも思われるが、学研『漢和辞典』その他の辞典によれば、「討論」の「討」は、「うつ」ではなく「たずねる」の意で、「すみずみまで、まんべんなく詳しくしらべる」ことを意味する。それゆえ、「異論をたたかわす」という意味を「討議」に含めるには、やや無理がある。奇しくも、篠原（2004）は、「新しい造語が許されるのなら、『開議デモクラ

ム・コノリーによって開発されたデモクラシーの一形式であり、コンセンサス（合意）というゴールよりも、緊張関係(tension)や異議異論(disagreement)を強調する。デモクラシーと教育に対するハーバーマスのような合理主義者のアプローチとは異なり、また、ジャクソンがp4cHIを発展させるにあたり影響を受けた禅を強調することによって、私たちは、「活動している理想的発話状況」⁴が新たな思考法を開き、デモクラシーの討議的ならびに論争の形態を超えるp4cの存在可能性について考える道が開けることを示したい。

2. 討議デモクラシーへの道：p4cHIは私たちをどこかへ導くのか？

「やさしいソクラテスの探究」でジャクソン(2017)は、p4cHIの理論と実践の基礎にある哲学的問題を表明した。彼の言葉によれば、「私たちは急いでどこかに到達しようとはしないが、私たちはどこかに到達するだろうと期待している」(p.12)。つまり、p4cの方向性やゴールには矛盾がある。私たちが抱く期待の「どこか」とは、どこなのだろう。私たちは、急いでどこかに到達しないにもかかわらず、特定のどこかに到達するのだろうか。p4cのゴールとして私たちが到達する場所があるのだろうか。

もしもp4cのゴールが合意（コンセンサス）にあるならば、p4cは討議デモクラシーと符合する。討議デモクラシーは、まさにハーバーマスの討議倫理

に由来し⁵、次の2つを基本特徴とする。「第一に、参加者は、理性によって基礎づけられた合意に至ることに関心をもち、それに動機づけられている。…第2に、討議には対話的平等という厳格な条件が伴う。誰も排除されてはならない。誰もが発言、質問、主張、ニーズや希望の表明を行う平等な権利を持っている。参加者に対して、内部または外部からの強制によって影響を与えることは許されない。」(Allen & Mendieta, 2019, p. 94, 下線引用者)ハーバーマス討議倫理学の核心をなすこれら2つの特徴を、以下で慎重に吟味しよう。まずは第2の特徴から始め、p4cとの呼応関係を示そう。

核となる第2の特徴は、p4cペダゴジーの価値観や実践と符合する。リップマンとシャープ(2018)によるP4Cの開発は、「自由、オープンな討論、複数性、自治、そしてデモクラシー」(p.247)への政治的コミットメントに動機づけられていた。デモクラシーの政治的实践に必要な実践的理性と反省的な探究・判断は、民主的社会的形成に積極的に関与できる個人間の相互対話と探究のスキルを育成することを必要とする。そして、デモクラシーにおける平等の理想を実現するための条件を作り出すのに役立つのが、P4Cの実践である。

リップマンとシャープのもとで学んだ後、ジャクソンはp4cHIを開発した。これは、ハワイの多文化環境でP4Cを実践しようとした際に生じた緊張から生まれたものである。例えば、「哲学者のペダゴジー」(Makaiau & Miller, 2012)は、カイルア高校

シー』とでもしたいところであるが、これ以上造語を提示して議論を混乱させるのもどうかと考えて、そのような結論〔討議デモクラシーとの訳〕に達した」(p.203,〔〕内引用者)と述べている。「闘議デモクラシー」の造語は、コノリーが提唱したagonistic democracyにこそ、ふさわしいであろう。この造語の使用も考えたが、自然な日本語の「論争」を選んだ。

⁴ 原著英語論文のタイトルにもなっている新概念Ideal Speech Situation in Actionは、邦訳が難しい。英語としては非常にシンプルであり、一種のジョークを含んでいるが、それを日本語で再現することは難しい。特にin Actionの訳が難しい。「活動している」「行為している」「活動のさなかにある」などの訳が考えられる。「生きて働いている」とか「生きられた」とかの訳も悪くないが、Actionという英語との隔たりが大きい。本論でも、訳語が揺らいている。今後、この概念と付き合っていく中で、訳語を定めたい。

⁵ 篠原(2012)は、討議デモクラシーの嚆矢をジョシュア・コーエンの1989年論文と見定めた上で、ハーバーマス『事実性と妥当性』(1992)により「討議デモクラシー理論は世界大に拡大した」としている(cf., p. 235)。なお、「デリバレーション(討議)」の用語の歴史は古く、「アリストテレスが政治上の概念として使い、ルソーも主権者としての人民の一般意思を形成するものは討議であるとし、議会政治理論の元祖E・パークも議会は討議的議会であると述べている」(篠原, 2012, p.vi)とされる。

の人種差別研究 (Ethnic Studies) のクラスで、それぞれの中学を卒業した後に集まった2つのコミュニティの生徒たちの間の緊張を和らげ、暴力を軽減するために有効だった (cf., Makaiau, 2017, p. 9; 田端, 2020, pp. 61-62)。それゆえ、リップマンとシャープのP4Cの政治的実践の核心にある実践的理性や反省的判断以上に、ジャクソンのp4cHIは、「セーフティ (安心・安全)」という概念を重視している。p4cHIでは、コミュニティ、探究、哲学、反省という4本柱を掲げ、コミュニティのメンバー間のセーフティの構築と関係性の深化が最も重要視される (Jackson, 2017, pp. 6-7)。

セーフティとは、身体的、情緒的、知的な安心・安全のことであり、暴力や強制や権力階層の支配からの自由を意味する。ジャクソン (2017) によると、「コミュニティのすべての参加者は、コミュニティのメンバー全員に敬意を払う限り、事実上どのような質問でも、どのような意見でも、自由に尋ねたり述べてたりすることができる」(p.6)。セーフティの精神を強化・維持するために、教師やファシリテーターには、「セーフティのルール」づくりが推奨される。例えば、「(1) コミュニティボールを持っている人だけが発言できる。その人は、話し終えたら、挙手している誰にボールをパスしてもよい。(2) どの人にも、発言しないでパスする権利がある。(3) どの人にも、「発言をお誘いする」権利がある。ボールを持っている人は、まだ話していない人にボールをパスし、まだ話していない人をみんなの思考に参加するようお招きする。」(Jackson, 2017, p.9) などである。

コミュニティボールの活用というp4cHIの独自性を別にすれば、p4cHIにおけるセーフティの精神は、ハーバーマスの対話的平等性の別表現に他ならず、その凝縮概念が「理想的発話状況」(Habermas und Luhmann, 1982, S.136; 訳p.164) である。それは、「外部からの偶発的影響によってコミュニケーションが妨げられないだけでなく、コミュニケーションの構造自体から生じる制約によっても妨げられない」(Habermas und Luhmann, 1982, S.137; 訳p.164) ような、理想的な対話の状況である。これがその先の第2の特徴である。

ところが、ハーバーマスのこの理想的発話状況は、しばしば抽象的であると批判され、現実のコミュニティに存在する権力関係を説明できないと限定的にとらえられてきた。例えば、ニクス・ルーマンは、「支配は、討議の体系にも構造的に埋め込まれているため、原理的に不可避である」(Habermas und Luhmann, 1982, S.332; 訳p.417) と反論する。確かに、日常生活での話し合いでは、学校の教室での話し合いも含め、発言権が平等でないなど、話し合いが誰かに支配されるのは普通のことである。それどころか、実際の討論では、知る者と知らない者との知識の不平等があり、話し上手と話し下手のスキルの不平等がある。理想的発話状況は、その語が示す通り、「理想」にすぎないとも思われる。しかし、私たちはp4cの実践経験から、理想的発話状況がp4c対話で実際に起きていると実感しているし、それは決して抽象的ではなく、生きられた現実であると感じている。この齟齬を、どう理解すればよいだろうか。鍵は、「理想」という概念をどう理解するかにかかっている。

ハーバーマスは次のように主張する。「理想的発話状況」は、「単にカント的意味での統制原理ではない」(Habermas und Luhmann, S. 140; 訳p.169)。つまり、それは私たちが向かうどこかではなく、私たちが目指すゴールでもない。むしろ、「私たちは、この想定を、言語的コミュニケーションの最初の行為において、常に既に前提しなければならない」(Habermas und Luhmann, S. 140; 訳p.169)。理想的発話状況は、「前提」なのであり、言語行為を始めるにあたって、対話のメンバー全員によって、「常に既に」先取りされてしまっていなければならない。「常に既に」とか「先取りする」とかの用語は、ハイデガーを彷彿とさせる。ただハーバーマスはこれらの用語を若干違った仕方を使っている。このことが、これまでの先行研究では見過ごされてきた⁶。そこで、ハーバーマスのテキスト解釈を、ここで慎重に行っておく必要があるだろう。これにより、彼の術語を明確化し、「活動 (行為) している理想的発話状況」という私たちの応用概念を導出しよう。ルーマンとの論争でハーバーマスは理想的発話状況を打ち出すのだが、その際、彼はこの概念を、原典ドイツ語で次のように説明している。

⁶ 第1著者は、2021年公表の小論で、この点を指摘した (cf., 田端, 2021, pp.38-40)。

— dann muß es sich bei dieser Idealisierung der Sprechsituation um einen Vorgriff handeln, den wir in jeder empirischen Rede, mit der wir einen Diskurs aufnehmen wollen, vornehmen müssen, und den wir mit Hilfe der Konstruktionsmittel, über die jeder Sprecher kraft kommunikativer Kompetenz verfügt, auch vornehmen können. Wie ist der Entwurf einer idealen Sprechsituation mit Hilfe der Sprechakte, die jeder kompetente Sprecher ausführen kann, möglich?

(Habermas und Luhmann, S. 136f, 下線引用者; 訳 p.164)

ハーバーマスのこのドイツ語は、ハイデガーのドイツ語原典に親しんだ者にとっては、『存在と時間』の術語を自ずと連想させる。下線を引いた3つの用語は、明らかにハイデガーからの転用である。ドイツ語Vorgriffは、『存在と時間』の術語で「予握」と訳される (vgl., Heidegger, 1986, S.150; 訳II, p.52)。ハーバーマス原著のvor-は、時間性であり、ハイデガーのいう「了解の予-構造 (独:Vor-Struktur; 英訳 fore-structure)」(vgl., Heidegger, 1986; S.151, 訳II, p.53) に他ならない。ハーバーマスの原語Entwurfは、『存在と時間』の核概念「企投 (英訳project)」(Heidegger 1962, p.136) そのままである。「企投 (Entwurf) は、投げることに於いて、可能性を可能性としておのれのために前もって投げ、それを可能性として存在させる」(Heidegger, 1986, S.141; 訳II, p.38)。ハーバーマスの理想的発話状況のこの記述は、ハイデガーの企投概念によって、よく理解できる。

それゆえ、ハーバーマスの上記引用は、次のように邦訳できるであろう。

—それゆえ、この発話状況の理想化で肝要なのは、ある種の予握である。それを私たちは、私たちが討議しようと思うあらゆる経験的発話において、先取

りしていなくてはならないのであり、それを私たちは、どのような話し手であっても、コミュニケーション能力のおかげで意のままにできる構成手段のおかげで、先取りできるのである。能力ある話し手なら誰でもできる発話行為の助けを借りて、理想的発話状況を企投することは、どのようにして可能だろうか。

引用文の最後は、複数の人々による理想的発話状況の共同企投が、現実的にどうすればうまくいくかという、いわば方法論的でテクニカルな問いである。それを簡便に実現したのがp4cHIであり、かなり大掛かりな手続きで実現したのが、討議デモクラシー (例えば討議型世論調査DP) 等であろう。

ハーバーマスの独創性は、対話の前提条件に、存在論的時間性を見出した点にある。理想的発話状況は、ハイデガーのいう私たちの共同企投である。上記の用語「常に既に」とか「予め前提されている」も、理想的発話状況の時間的記述である。この前提を、ハーバーマスは「反事実的」とも形容する (Habermas und Luhmann, S.140; 訳p.168)。換言すれば、理想的発話状況が属する時間性は、言語的コミュニケーションが成立している事実的世界の時間性ではない。そうではなく、いわば存在論的時間性である。この時間性を理解するためには、ハイデガーの鍵概念である「存在論的差異」を考慮しなければならない。それは、存在的 (独ontisch; 英ontic) と存在論的 (独ontologisch; 英ontologic) との区別である (vgl., Heidegger, S.12; 訳I, pp.33-34)。

この差異は、存在 (英語の大文字のBeing) と、存在者 (英語の小文字のbeing) との違いに対応している。ハイデガーにとって、一人ひとりの人間、つまり彼のいう現存在 (独:Dasein) は、存在 (大文字のBeing) そのものに特別な関係をもつ存在である⁷。私たちは、存在そのものを問うたり、それに態度をとったりできる特別な存在者である。自然的態度の私たちが存在者に関わるのに対し、存在への問いは存在論的である。例えば、私たちが何かを欲

⁷ 日本語の「存在」は、存在論的に区別される「存在 (独Sein; 英Being)」と「存在者 (独Seiendes; 英being)」の両方の意味を担っている。「私の存在に意味があるのか」という文章の「存在」は、ドイツ語のSein (英Being) を意味し、「私は取るに足らない存在だ」という文章の「存在」は、ドイツ語のSeiendes (英being) を意味する。

し、意図し、考え、議論するとき、私たちは、その何かという存在者に関わっている。対して、私たちがその欲求や意志や思考や議論それ自体を問うとき、例えば、「この議論にどんな意味があるのか」とか「そもそも議論とは何か」とかと問うとき、つまり存在的な配慮に対してそれらを問いに付し、括弧に入れるとき、存在論的領野が開ける。私たちは、存在論的前了解について、考え始めるのである。

「理想的」とか「反事實的」といった用語は、存在論的に、つまり存在との関連で理解されるべきである。理想的発話状況は、実際の話し合いにおいて表象されたり想像されたりするわけではない。そうではなく、それは、対話の全メンバーによって企投され先取りされるものである。P4cの対話はこの共同企投によって始まる。確かに実際の対話では、セーフティを侵害するような発言があることもある。しかし、ファシリテーターやメンバーは、そうした対話をそうした対話として認識し、修正を図ることができる。それが可能になるのも、理想的対話状況が、共同企投として、メンバーによって常に既に先取的に予握されているからである。

私たちは、この先取りを「活動（行為）している理想的発話状況」と名づけよう。私たちが言語的コミュニケーションの資質・能力をもつ限り、私たちはそれを現実に企投できる。私たちの見立てでは、これこそハーバーマスの発見であった。この共同企投により、私たちの実存は変貌する。これがp4cの実践知である。

セーフティと連動して、私たちの態度は変容する。私たちは、自身の見解を強要することをやめる。私たちは、自分とは異なる他者の声に耳を傾けるようになり、彼／彼女たちの視点を、自分のそれと同じく注意深く吟味するようになる。自分と異なる意見に対しても、たとえそれが気分を害するものであっても、即座に反応するのを控える。私たちは、自分の考えに固執するのをやめ、他者の立場にも立ってみる。何よりもまず、安心・安全なp4cサークルで、私たちは心を落ち着かせ、どこかに到達しようと急ぐことをやめる。p4cの実践によって時間をかけて起こるこのような変容は、理想的発話状況が実際に生きて働くことを示している。

3. 論争デモクラシーへの道：p4cHIは私たちをどこにも導かないのか？

p4cHI-Mは、討議デモクラシーの第2の基本特徴を共有するものの、論理的思考（reasoning）を通して合意に達するという第1の基本特徴は共有しない。私たちのp4cHI-Mは、経験的にも理論的にも、対話による合意形成に関心もなければ、方向づけられてもいない。p4cの重要な要素は、急がないこと（not being in a rush）、特に、説得力のある議論を展開したり、合意に達したりするために、論理的思考のスキルを習得しようと急がないことである。学校教育の構造の多くが、授業時間や昼食のベル、その他のさまざまな時間的制約など、急ぐことに重点を置いているため、p4cを授業カリキュラムに導入するときには、それが正しく効率的に実施できるか懸念を伴うことが多い。これに対し、p4cは、ベダゴジーとしての教育へのアプローチであり、プログラムとか方法論ではなく、何よりもまず考え方や関わり方の一つの在り方である以上、p4cの「ゴール」は単純に「p4cをすること（to do p4c）」である。それは至ってシンプルな活動である。輪になってじっと座る、コミュニティボールを作ってパスする、誰かが話しているときは静かに聞くといった活動である。こうした活動によって、教室の重力は、教師から生徒に移行する。そこでは、死後の世界について活発に議論することもできる（Jackson, 2013, p. 106）。P4cは特定の内容やスキルを生徒に教えることに頓着しないため、急いでどこかに到達しようとはしない。むしろ、p4cは、共に考え、関わり合うという実践であり、合意を含む様々な場所に私たちを導くことがあったとしても、特定の場所に向かうことを根本的には志向していない。この意味で、p4cは私たちをどこにも導かないが、まさにこの「どこでもない場所（no-place）」で、p4cの倫理的かつ民主的な実践が起こるのである。

ハーバーマスの討議デモクラシーが、政治問題に関する合意形成の手段として合理性を用いるのに対し、論争デモクラシーは、p4cHI-Mと同様、ゴール志向ではなく、具体的な民主的实践に伴う緊張や意見の差異を尊重する。論争デモクラシーは、討議デモクラシーの代替案として、アイデンティティの关系的かつ集合的な概念との関連で発展してきた。私

たちのアイデンティティは、集合性（アジア人、アメリカ人、白人、オタク、教師など）と差異（黒人 vs. 白人、西洋 vs. アジア、文明 vs. 野蛮など）の両方によって定義されるが、政治的实践はしばしばこのアイデンティティのパラドックスを抑制し、複数性（pluralism; 多元主義）と深い偶発性（contingency）を調整するためにそのパラドックスを認識・利用するのではなく、排他的普遍性を推進するためにそれを利用している（cf., Connolly, 1991, pp. xiv-xv）。ウィリアム・コノリーの政治理論家は、討議デモクラシーの形態に関して、義務論的な倫理観（例えば、キリスト教の十戒やカントの定言命法）から生じる寛容性だけでは、今日の政治問題における差異を裁定するには不十分であると批判する。

その代わりに彼（1991）は、第一に、アゴーンの敬意（agonistic respect）⁸を提案する。それは、「差異を越えたつながりの関係であり、一連の少数派が衛星としてその周囲に許容される多数派のアイデンティティの統合を必要としない」（p. xxviii）。なぜなら、それは、同じ政治的領域において複数の倫理観が対立することが多い現在の世界にふさわしい、より広範な市民的美徳（civic virtue）だからである。

第二に、論争デモクラシーは、実存的関心が公共生活やアイデンティティ問題に与える影響を、真剣に受けとめる。ハーバース（1986, pp. 53-54）のコンセンサス主導のデモクラシーでは、罪悪感、孤独、病氣、死、救済の必要性といった実存的な問題は、社会や政治理論では克服できないという理由だけで、政治理論の領域外に追いやられる。これに対し、コノリー（1991）の「論争デモクラシー」は、現代の政治生活の特徴づけるようになったルサンチマン（憤り・怨念）の心理を和らげるために、アイデンティティと実存的関心事との関連性を政治的に扱う（cf., pp. 162-164）。

合意重視の議論とは異なり、コノリーが第一に指摘するアゴーンの敬意と複数性の強調は、p4cHI-Mの価値観と共鳴する。先の引用の通り、Jackson（2017）によれば、セーフティは、コミュ

ニティのすべてのメンバーに対する尊敬を伴う。こうしたセーフティ観は、しかしながら、ただ単に居心地の良さを感じることではない。P4cHI-Mが実際に行っているのは、深く考えるツールキットや振り返りを活用することで、単に同じ（似通った）意見・考えをもつコミュニティを形成することではなく、むしろコノリーがアゴーンの敬意と呼ぶものを創出している。

Jackson（2017）は次のように言う。「ゴールは、誰かを特定の答えに説得することではない。そうではなく、誰もが、関連する問題の複雑さをいっそう深く理解することであり、そうした様々な複雑さの中で、いっそううまく立ち回る力を身につけることである。」（p. 7）探究は、生徒たちの疑問や関心から立ちあがるのであって、教師とか、コミュニティの外部とかで予め決めた内容や議論からではない。セーフティには、正真正銘の傾聴が必要である。みんなの傾聴があってこそ、各メンバーに時間と空間が与えられ、メンバーは自分の考えを表現できるようになる。考えを表現するには、忍耐力が必要であり、その意見表明が話題に関するその人の最終的な立場や考えであるという思い込みを外す必要もある。理想として、成熟した探究のコミュニティでは、表現された考えは、粗削りで、ろ過されておらず、柔軟であり、それらを「いっそう深く掘り下げる」ことで「発展」する可能性に開かれている。ゴールは、どこかへ到達したり何かを達成したりすることではない。そうではなく、真の傾聴の場を創造し、最終的には思慮深い批判を行うことである（Jackson, 2017, 6）。

実存的関心と公共生活の関係性に関するコノリーの第二の指摘も、p4cと重なりあう。コノリー（1991）の「闘争（agonism）」概念は、合意に訴えることなく、差異への敬意を考慮に入れている。それは、ジャクソンがセーフティの定義で暗示した敬意であり、アゴーンの敬意である。それは、「最終的に異なる根源を人びとが尊重することを可能にし、差異を超えた相互敬意を涵養することを可能にする市民的美徳である」（p. xxvi）。しかし、この

⁸ コノリーのこの用語も訳しにくい。Agonistic democracyは、deliberative democracy（討議デモクラシー）との対応関係で「論争デモクラシー」と訳したが、agonistic respectは議論の場面に限定されるわけではないため、「論争的な敬意」とは訳せない。邦訳の「アゴーンの敬意」（コノリー, 1998, p. x）を踏襲した。

「差異への敬意」でさえ、共通の根源には見出されない。むしろ、アゴーン的な敬意とは、「敬意の根源について互いに争う可能性を秘めた逆説的な敬意であり、特に、敬意を受ける資格そのものが、それが主張する普遍的なものを認めなければならないことを要求する場合に、その逆説性が強まる。また、他者による言動が、自分の実存的信念を再解釈するきっかけとなったり、別のものへの改宗へと導いたりする可能性も含んでいる」(p. xxvii)。言い換えれば、政治的な差異が、異なる信仰や根本的な意味の源泉に基づいている場合、政治は、自分自身や他者を開放し、複数の可能な源泉に身をゆだねることで、それらの源泉を争うことも含めなければならない。

ここまでコノリーの議論をたどるなら、p4cのセーフティと、アゴーン的な敬意との違いも明らかになる。p4cにおけるセーフティは「市民的美徳」ではない。それは「美徳」でも「市民的」でもない。上記引用の通り、コノリーの市民的美徳、すなわち「差異を超える相互敬意」は、「涵養される (be cultivated)」必要がある。しかし、p4cは参加者を涵養することを目的としていない。この市民的美徳をもたない市民は、アゴーン的な敬意を実践できない。これに対し、セーフティは、子どもを含む誰もが共同企投できる。P4cのセーフティが理想的発話状況である限り、ハーバーマスが先に述べていたように、それを「私たちは、どのような話し手であっても、コミュニケーション能力のおかげで意のままにできる構成手段のおかげで、先取りできる」のである。対話の出発点にあるp4cのセーフティは、なんら闘争(アゴーン)的ではない。それは、争いでもなければ、闘いに根差してもいない。むしろそれは平安であり、究極的には「涅槃」にも似ている。

以上、討議デモクラシーと論争デモクラシーを参照することで、p4cHI-Mの立場がいつそう明確になってくる。P4cの対話は、まずお互いが安心・安全に共存することに身を投じることから始まる。P4cの最優先事項は、安心・安全な空間と時間を共同で作る、維持することである。安心・安全な空間が守られている限り、参加者はどのような視点をとってもよいし、何を言ってもかまわない。対話自体が独自に整合性を保ち、対話の方向性を決定していく (cf., Jackson, 2017, 11)。対話は合意で終わることもあれば、意見が一致しないまま、アゴーン的

敬意を反映することもできる。どんなに議論が白熱しても、参加者の心は穏やかである。なぜなら、私たちは安心・安全な立場に立ち続けているからである。それゆえ、p4cは、論争的と討議的デモクラシーの両方を超えるのを手助けしてくれる。P4cにおけるセーフティは、統制的理念としての論争的あるいは討議的デモクラシーにとって代わるものではなく、実存論的で存在論的な「基盤」であり、その上でデモクラシーやその他の政治実践も可能になる。P4cのセーフティは、対話を開始する前提の共同企投であり、安心・安全な実際のコミュニティを創出するための実践でもある。セーフティ概念のこうした循環性は、コミュニティのメンバー間の異なる解釈枠組みによって生じる諸問題に対処するための無限の可能性を開く。

P4cでは、子どもたちは教室の床に座っているのだが、最も重要なのは、彼らがセーフティという「基盤(存在)」の上に立っていることである。子どもたちが立っている場所は、実在するにもかかわらず、存在的な現実世界ではない。P4cの立場は、「大なる肯定にほかならない」と西谷啓治が洞察した「空の場 (field of śūnyatā)」として記述できるかもしれない(西谷, 1987, p.149; 英訳, p.131)。

4. デモクラシーを超える道：p4cHIは禅の一形態だろうか？

ジャクソン(2017)によれば、プラトンと同様に、哲学は不思議(wonder, 驚き)から始まる。幼い頃から深く考え、疑問を抱くように私たちを駆り立てるのは、私たちの根源的な不思議である(p.4)。従来の学校教育モデルでは、生徒の疑問は中心に据えられていない。代わりに、生徒は特定のコンテンツを学習し、その知識を標準化されたテストで示すことが期待されている。その結果、子どもたちは、すべての問いには、自分が身につけた言語や文化によって説明できるような、明白で知ることのできる答えがあると考えよう、教え込まれることが多い。これに対抗するために、p4cHIは初心(beginners mind)に返ることで、私たちの中の根源的な不思議と再びつながることを目指している。禅僧鈴木俊隆の著作は、ジャクソンが愛読する書物の一つであり、彼のゼミナールではいつも参照される。彼

(1970) は、それを引用しつつ、p4cHIの参加者が無心になり、新しい知識や経験で満たされる準備を整えた、オープンで情熱的な態度に至ることを推奨している (pp.21-22)。世界を見るための特定の枠組みで頭がいっぱいになっているとき、特に政治の分野で、異なる枠組みを持つ人と出会うと、意見の相違にとどまらず、実存的危機やルサンチマンにつながる可能性がある。あらゆる枠組み、偏見、固定観念を括弧に入れることは、初心に立ち戻り、セーフティの立場に身を置くことである。セーフティの立場において、私は、純粋な観察者 (observer) である。私は、心穏やかに、特定の枠組みに影響されている自分自身と他者とを観察する。

私は、p4cの安心・安全なコミュニティの中で、自分の意見を、それが具体的な信念となる以前にとどまり、判断することなく、ありのままに観察する。安心・安全な私は、枠組みを枠組みとして、偏見を偏見として、固定観念を固定観念として、ルサンチマンをルサンチマンとして存在させる。私たちは、自身の意見をありのままに自覚できてはじめて、それを不偏不党に吟味することができ、公正な判断や評価を下すことができる。第一は、様々な考えを、ありのままに存在させることである。「あるがまま存在させる (letting it be)」という言葉は、理想主義的あるいは思弁的に聞こえるかもしれないが、p4cの実践における生きられた経験である。すべてをあるがままに在らしめるというこの生き生きした経験は、中国の「無為」思想に根ざしており、またマインドフルネスやその他の瞑想的な実践の伝統とも関連している。多くの研究者は、存在的な言語と論理でそれを記述しようと試みるが、それは生きられた実践であるため、そうした試みはしばしば失敗に終る。存在的な記述には限界がある。そこで、私たちは、西谷啓治の空の哲学を用いてみよう。その存在論的な言語と論理によって、生きられた経験のダイナミズムを記述してみたい。

ハイデガーに師事した日本の哲学者西谷は、禅の思想によってハイデガーの実存主義を転回したと私たちは見ている。逆に、彼は禅思想を哲学的に洗練させた。本稿では、コノリーの「差異を超えた相互敬意」との対照で、西谷の「回互的關係

(circuminsessional relationship)」⁹を論じよう。西谷はこの関係を次のように叙述している。

万有のそれぞれがその「有」に於て絶対に独自でありつつ、然も一つに集まるといことは、…一切のものが互いに主となり従となるという関係であるが、そういう関係を「回互的」と呼べば、かかる回互的關係は空の場に於てのみ可能である。

(西谷, 1987, p.166; 英訳p.148)

「一切のものが互いに主となり従となるという関係」とは、主従が相互に交代するという意味ではなく、「それ自身他のすべてに対して主の地位にあるものが、…同時に他のすべてに対して従の地位に立つ」ということ、すなわち、あるものが主であながら「同時」に従でもあるという「通常の思惟からすれば矛盾でしかない」(西谷, 1987, p.166; 英訳 p.147) 関係である。この矛盾した関係は、p4cのセーフティで感じる関係性をよく言い当てている。

安心・安全なp4cの輪の中で、つまり、活動する理念的発話状況において、私たちは相互に独自であり、対等である。私たちはこの相互性をどこかで学んだわけではない。私たちは、自身の能力によって、自身の実存をこのモードに転調しただけである。安心・安全の輪の中で、私が誰かの意見に耳を傾けるとき、私はその人を一切の中心に据える。しかし、私は私の立場を放棄するわけではない。私は、自分の立場をあるがままに存在させながら、その立場で先に進むことなく、他者の立場をあるがままに存在させる。西谷が記述するように、「あらゆるものが夫々それ自身のもとにあることを止めずに同時に他のもののもとにあるということは、夫々のものの『有』が互いに他のすべてのものの『有』によって支えられ、立てられ、有らしめられているということである」(西谷, 1987, p.168; 英訳p.149)。ここでは、私は主であり同時に従である。そこに矛盾はない。むしろこれは、安心・安全なp4cの輪の中でコミュニケーションをするときの私たちの経験にうまく当てはまる感覚である。

この感覚がいつそう顕在化するの、自身が話し手であるときよりも、聞き手であるときである。と

⁹ 原著では「回互的關係」と旧字体で表記されているが、引用にあたって新字体に改めた。以下同様。

りわけ、相手の話に反射的に反応しなくなったとき、p4cのルールを思い出し、その反射的反應を自制するときである。反射的反應を抑えられない子どもをしばしば目にするが、最もよく目にするのは、反応しすぎる教師である。教室でp4cを成立させる鍵は、子どもの意見に教師が反応することを差し控えることかもしれない。学校文化の担い手である教師には、多くの場合、これが最も難しいことのようにある¹⁰。

反射的反應を自制するとき、私には葛藤が生じる。反応しようとする自分、それを観察する自分、反応を制する自分の葛藤である。反応しようとする自分と、それを観察し抑制しようとする自分とは、同時に存在する2つの自分である。前者は現実世界に属し、後者は空の立場にある。反応しようとする自分は衝動的で熱くなっている。対して、その自分を見て制する自分は常に変わらず冷静である。空の立場を離れ、相手の話をさえぎり、自分の言いたいことを言ってしまうと、私はp4cのルールを破ることになる。そのまま話題を独占し、自分が望む結論に議論を誘導するならば、私はp4cのルールを破り続けることになる。このとき、私はルーマンが指摘する通り「支配」を原理とする現実世界に埋没してしまうことになる。私はもはや、他との回互的關係を生きてはいない。

セーフティというルールを破りそうになる瞬間、しかもそうした自分を自覚し、破らないよう自制する瞬間こそ、セーフティとは何か、セーフティを守り続けるとはどういうことが顕在化する場面である。この場面から、セーフティ（安心・安全）は、私の実在的な心の中にあるのではなく、その心を離れた空の立場にあることが判明する。

もちろん、私がセーフティを意識するのは、自身の反射的反應を控えるときだけではない。私は、誰かの発言を聞いているときも、自分が話しているときも、セーフティを意識できる、つまり空の立場を

自覚しそれに立脚し続けることができる。さらに言えば、p4cの対話で育まれるセーフティの自覚と実践は、p4cの対話の場を超えて、あらゆる生活場面に、またあらゆる社会体制に拡張できる。それは、空の立場の自覚と実践として、私たちの新しい存在の仕方である。

ここまで論を進めれば、p4cは、討議デモクラシーと論争デモクラシーを超える第3の道であり、いずれにも開かれていることが明らかであろう。以上、p4cと両者の緊張關係の内実が明確化したところで、本稿の結びとしたい。

【謝辞】本論は、JSPS（独立行政法人日本学術振興会）「令和6（2024）年度日本学術振興会外国人研究者招へい事業 外国人特別研究員（JSPS サマー・プログラム）」の研究助成の成果の一つである。第2著者の日本への渡航費・滞在費・研究費を助成して下さったJSPSに、この場をお借りして感謝申し上げます。この事業は、助成を受けた特別研究員と受け入れ先研究者にとって、非常に意義深いものであった。

引用文献

- Allen A., Mendieta E. (2019) . *The Cambridge Habermas Lexicon*. Cambridge University Press.
- Cam, P. (2018) . The theory of education made flesh. In M. R. Gregory and M. J. Laverty (Eds.) , *In Community of Inquiry with Ann Margaret Sharp* (29-37) . Routledge.
- Connolly, W. E. (1991) . *Identity/Difference: Democratic Negotiations of Political Paradox*. University of Minnesota Press.
- コノリー, ウィリアム・E. (1998) 『アイデンティティ\差異—他者性の政治』 杉田敦・齋藤純一・権左武志訳. 岩波書店.
- グレゴリー, M.R., ヘインズ, J., ムリス, K. (2020) 『子どものための哲学教育ハンドブック—世界で広がる探究学習—』 小玉重夫監修. 豊田光世・田中伸・田端健人訳者代表. 東京大学出版会.
- Habermas, J. und Luhmann, N. (1982) . *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie*. Suhrkamp Verlag. 佐

¹⁰ ここで第1著者の個人的な経験を挿入しておきたい。「今回のp4cでは、対話が始まったら自分の発言を2回だけにしようと決めていた」と語った中学校教師がいた。それを聞いて、第1著者は、この教師のp4c理解が深まっていることを実感した。そういう第1著者自身、2017年の時点では、反応しないことの重要性にまだ気づいていなかった。当時、ワイキキ小学校の5年生の教室でp4cに参加したとき、ある子どもの発言に、周囲の子どもたちが反射的に反応したとき、担任教師が「反応しない！（Not react!）」と注意したことがあった。それを聞いて第1著者は、「どうして反応してはいけないのだろうか？」と素朴に疑問を感じていた。

- 藤嘉一・山口節朗・藤沢健一郎 (1987) 『ハーバーマ
ス・ルーマン論争 批判理論と社会システム理論』木鐸社。
- Habermas, J. (1968) . Ideologies and Society in the Postwar
World. In P. Dews (Ed.) , Dews *Habermas and Solidarity*
(pgs) . Verso.
- Heidegger, M. (1986) . *Sein und Zeit*. Max Niemeyer
Verlag. 原佑・渡邊二郎訳 (2003) 『存在と時間 I・II』中
公クラシックス。
- Heidegger, M. (1962) . *Being and Time* (J. Macquarrie and
E. Robinson, Trans.) . Basil Blackwell. (Original work
published 1927)
- Jackson, T. (2001) . The Art and Craft of ‘Gentle Socratic’
Inquiry. In A. L. Costa (Ed) . *Developing Minds: A
Resource Book for Teaching Thinking*. Association for
Supervision and Curriculum Development.
- Jackson, T. (2013) . Philosophical rules of engagement. In S.
Goering, N. Shudak & T. Wartenberg (Eds.) , *Philosophy
in schools: An introduction for philosophers and teachers*
(99-110) . New York: Routledge.
- Jackson, T. (2001) . The Art and Craft of ‘Gentle Socratic’
Inquiry. In Arthur L. Costa (Ed) . *Developing Minds: A
Resource Book for Teaching Thinking*. Alexandria, VA:
Association for Supervision and Curriculum Development.
- Lipman, M. (1988) . *Philosophy Goes To School*. Temple
University Press.
- Lipman, M. (2001) . Philosophy for Children: Some
Assumptions and Implications. *Ethics in Progress* 2 (1) ,
3-16.
- Makaiau, A. S., Miller, C. (2012) . The Philosopher’s
Pedagogy. *Educational Perspectives* 44 (1-2) , 8-19.
- Makaiau, A. S. (2017) . Using a Philosopher’s Pedagogy to
Teach School Subjects: The Case of Ethnic Studies at
Kailua High School. *Journal of Philosophy in Schools* 4
(1) , 4-26.
- 西谷啓治. (1987) 『西谷啓治著作集 第10巻—宗教とは何か
—』創文社. Bragt, J. V., Trans. (1982) . *Religion and
Nothingness*. University of California Press.
- Sharp, A. M. (2018) . The Community of Inquiry: Education
for Democracy. In M. R. Gregory and M. J. Laverty
(Eds.) , *In Community of Inquiry with Ann Margaret
Sharp* (241-250) . Routledge.
- Sharp, A. M., Laverty, M. J. (2018) . Looking at others’
faces. In M. R. Gregory and M. J. Laverty (Eds.) , *In
Community of Inquiry with Ann Margaret Sharp* (120-
130) . Routledge.
- 篠原一. (2004) 『市民の政治学—討議デモクラシーとは何か
—』岩波書店.
- 篠原一編. (2012) 『討議デモクラシーの挑戦—ミニ・パブ
リックスが拓く新しい政治—』岩波書店.
- Suzuki, S. (1970) . *Zen Mind, Beginner’s Mind* (T. Dixon,
Ed.) . Weatherhill.
- 田端健人. (2021) 「子どもの哲学対話のコミュニティー討議
倫理の社会的「共同存在」論—」実存思想協会編『実存
思想論集XXXVI 哲学対話と実存』知泉書館 (29-51) .
- 田端健人. (2020) 「教室での子どもの哲学対話—米国ハワイ
とみやぎの実践動向—」『教育学研究』第87巻. 第2号 (237-
244) .